



1885 - 2010

創立 125 周年

創立 125 周年記念行事

「理工学 学術・研究交流会」

「運動」、回転、するタンパク質を紹介

野地博行・東大教授が特別講演

中央大学創立125周年を記念して、「理工学 学術・研究交流会」（理工学研究所など主催）が11月1、2

の両日、後楽園キャンパス3号館で開かれた。会場には理工学研究所や大学院生らによる研究成果約60件がポスター展示され、研究者と来場者が活発に意見交換する場面がみられた。

交流会のメインイベントは、1日に行われた東京大学大学院工学系研究科応用化学専攻教授の野地博行氏の特別講演会。研究の発展が著しい「ナノバイオ」の研究者である野地氏は、『生体分子機械のナノメカノ

ケミストリー&デジタルバイオ計測デバイス』という題目で講演した。

野地氏は、最初に、生命体の細胞の中で重要な機能を担うタンパク質を顕微鏡で撮影した動画で紹介。スクリーン上には、きれいな蛍光色を発しながらあちこち動き回るタンパク質が映し出された。この「運動」をするタンパク質を見た野地氏のお子さんからは、「これは何の虫なの？」と質問されたというエピソードも紹介した。これは、最近の研究

成果で、まだ高校の生物や化学の教科書には書かれていないという。また野地氏は、世界で初めて顕微

鏡で見て確認した「モータータンパク質」を紹介。この「モータータンパク質」は、大きさが

ナノメートルサイズ（1メートルの10億分の1）しかなく、細胞のミトコンドリアに存在する小さな物質で、細胞のなかで機械のモーターのように回転する。

この「モータータンパク質」が回転することによって、「生

命体が活動するのに必要なエネルギーをつくり出す」という。しかし、その仕組みには謎が多く、30年程前から世界中の研究者が研究に取り組んでいた。東京工業大学の研究グループにいた野地氏は、回転する様子を実験で示す研究に取り組み、1997年にその様子を確認し、発表した。

野地氏は、「研究成果を出すのに、



講演する野地博行教授

研究室の方々と膨大な時間を費やしてデイスカッションをした。また他の大学の先生の新しい実験技術が無くてはならなかった。さまざまな研究者との協力のもとでの成果です」と振り返った。

最後に野地氏は、若い研究者に向けて「今までにない新しい発見や解

明は、学際領域から生まれる。そこでは、頭で悶々と考えるより、実際に手を動かしてまず「やってみる」ことが何より重要だ」と自身の経験をもとにしたメッセージを送った。

(学生記者 小室靖明 II 理工学研究科物理修士1年)

『理工学 学術・研究交流会』 エニグマ暗号機を特別展示 ドイツ・ナチス軍が終戦まで使用

理工学 学術・研究交流会の展示コーナーで、人目を惹いたのが、日本に2台しか現存していないという『エニグマ暗号機』。展示されたのは、そのうちの1台で、辻井重男・研究開発機構教授が所蔵しているものだ。軍用暗号機であるエニグマ暗号機が使われたのは、第二次世界大戦中で、ドイツのナチス軍が終戦時まで使用していた。

展示会場に置かれていたエニグマ

暗号機は、古いワープロのような形の機械。大きさにして、約30センチ四方とかなり大きい。近寄ってよく見てみると、キーボードとローターと呼ばれる南京錠の数字合わせのよくな部分、そしてAからZまでが印字されたランプが組み込まれていた。「これって、まだ使えるんですか?」と聞いてみると、「もちろん」という返事が返ってきた。早速デモンストレーションをお願いしてみた。

操作は意外と簡単で、素人の記者でもすぐに理解できた。「こんなに操作が簡単だと、すぐに解読されるのでは?」と心配になった。しかし、現在あるスー

パーコンピュータを駆使しても、この暗号を解読するのに1年ほどかかるらしい。

展示会場は、展示物に近寄れないほどの人だかりで、多くの人が、物珍しげに観察し、記念写真を撮る人も多くいた。

(学生記者 橋本奈緒美 II 理工学研究科博士後期3年)



エニグマ暗号機

創立125周年記念行事

「日本の未来と大学生」をテーマに
ジャーナリスト 田原総一郎氏講演会開く

創立125周年学術企画の一環と

して、『日本の未来と大学生』のテーマでジャーナリスト、田原総一郎氏の講演会が11月14日（日）、多摩キャンパスのクレセントホール（9号館）で行われた。

田原氏は1934年滋賀県生まれ。テレビ朝日系『朝まで生テレビ！』

『サンデープロジェクト』でテレビジャーナリズムに新境地を拓くなど、鋭い切り口で幅広い社会問題について論評している。98年には戦後の放送ジャーナリスト一人を選ぶ坂戸又一郎賞を受賞。『日本の戦争』（小学館）、『スバリ！先読み日本経済』（アスコム）など著書多数。現在は早稲田大学特命教授として大学院での講義のほか、「大隈塾」塾頭も務める。

新聞、テレビの報道はウソ！

講演の冒頭、「いろいろ話したいことがある」と口火を切った田原氏は、尖閣諸島問題で揺れる日中間係を取り上げ、「新聞やテレビがいかに嘘の報道をしているかを言いたい」と語りはじめた。

尖閣諸島沖での中国漁船衝突事件のビデオ流出については、菅直人政権は動画投稿サイトへの投稿関与を認めた海上保安官を「逮捕しないだろう」と推測。逮捕してしまえば、「ビデオが本物であることを認めることになる」と解説した。

ベトナムでの日中首脳会談が中国側から突然キャンセルされたことや、横浜でのAPEC（アジア太平

洋経済協力）首脳会議で日中の首脳会談が20分間しか行われなかったことについても、「中

国が日本をバカにしている」という報道は間違い」で、「大国の意思を示す」という声が中国の中で強まっているからで、つまり中国国内の問題に因がある」と指摘した。

また、ロシアのメドベージェフ大統領が初めて北方領土を訪問した問題についても、プーチン首相の影響下から抜け出

したいという大統領の意向があったからで、「ロシアの国内問題だ」と語った。

日本は産業構造改革が必要

田原氏は、民主党政権が抱える課題にも切り込んだ。「長い期間、野党で、与党に『ダメ、ダメ』と反対をしていればよかった民主党は、政



「日本の未来と大学生」をテーマにした講演会

権をとる準備をしてこなかった」と指摘。例として、事業仕分けで（無駄な予算を）7兆円減らすと言っていたのに、政権をとったら実際には「7000億円しか削減できていない」ことを挙げた。

沖縄・普天間の米軍基地移設問題に関する鳩山由紀夫首相（当時）の対応について「首相の自覚がない」と嘆いた田原氏は、現在の菅政権も官房長官や閣僚らが重要な問題をトップに伝えていないと批判した。加えて、「これは民主党政権だけでなく、日本の多くの民間企業にも見られる問題だ」と指摘した。

そして話題は「日本の未来」に及んだ。田原氏は、2000年に国際競争力が世界トップだった日本は現在27位で、先進国の中で最下位であることを紹介し、「これは産業構造が当時から変わっていないからだ」と述べた。そのうえで、アラブ首長国連邦での原子力発電所建設の受注先が日本メーカーを抑え韓国企業に決定したことや、将来性のある水ビジ

ネスでも日本の参人がほぼ無い現状を指摘し、「みんなで力を合わせて、構造改革をしなきゃダメだ」と強調した。

答えのない問題を考える

一時間ほどの講演のあと、質疑応答が行われた。このなかで、「学生

は未来のために今何をするべきですか」という質問に対し田原氏は、「今の学生に必要なのは、社会の様々な問題に関心を持ち、答えのない問題を考えることだろう。そうすることで先行きの見えない不透明な現代は、明るい未来へと切り開かれていくだろう」と語った。

この他、会場からは、「もつとテレビに出演し、議論を見せて欲しい」という応援メッセージも飛び出し、会場からは大きな拍手が沸き起こった。
（学生記者 金子小百合Ⅱ法学部1年／宮寺理子Ⅱ法学部1年）

創立125周年記念行事

本学OB テレビ朝日社長 早河洋氏講演会

「私のテレビ人生〜中央大学で学んだこと〜」

本学OBでテレビ朝日代表取締役

社長の早河洋氏の講演会『私のテレビ人生〜中央大学で学んだこと〜』

が、11月27日（土）、多摩キャンパス8号館で開かれた。経済学部が創立125周年記念特別企画として開催したもので、会場の大教室は就活を控えたスーツ姿の学生で埋まった。早河氏は、1944年生まれで山梨県笛吹市出身。1967年に本

学法学部政治学科卒業後、日本教育

テレビ（現テレビ朝日）に入社。広報、編成、報道の各局長を歴任し、2009年6月から現職。プロデュー

サー時代には、『ニュースステーション』（現報道ステーションの前身）を立ち上げた。

「私の話はたぶん自慢話になると思う。今から話す自分史から、何か一つでも二つでもよいのでみなさん

の中に残ればよいと思います」と口

火を切った早河氏は、自身が学生時代を過ごした駿河台キャンパスと多摩キャンパスを比べて、話を進めた。

「多摩キャンパスに来るのは今回が3回目。駿河台キャンパスとはまったく雰囲気が異なると思います。駿河台キャンパスはとても狭く、都会の猥雑さの中でもまれて生活しました。多摩キャンパスにはそうした



講演する早河洋・テレビ朝日社長

いが、後に社会に出て役立った」と振り返った。

日本教育テレビでアルバイトしていた早河氏は、当時の朝のワイドショーのキャスターに勧められて、テレビ局を受けることを決意。「TBSは落ちたが、テレ朝にはトップの成績で合格した」。

入社1年目は放送のメカニズムを学び、2年目はアシスタントディレクターとして報道部署で働き、3年目は報道記者として警視庁記者クラブで三億円事件などを取材した。

報道記者からディレクターを経て、プロデューサーになった早河氏は、秀でたテレビ番組に贈られるギャラクシー賞を受賞。そんなとき、「ニュースステーション」の立ち上げにかかわることになった。ゴールデンタイムのニュース番組は民放では初めてで、半年かけて準備した。ところが、「放送スタート時の視聴率は9%台と低く、このまま結果が出なければ、責任をとってやめるつもりだった」という。上司から「君

はやりたい番組をつくっていないんじゃないか」と言われ、「自分がやりたいことをやっていたのかどうか、非常に悩みました」と早河氏。そこで番組スタート4ヶ月目から、自ら総指揮をとり、視聴率を上げていった。

早河氏は、自らの半生を振り返りながら、会場を埋めた学生に向かって、学生生活で留意する点について、「大学生のときに、友人や先輩・後輩などとのつながりで誰を選ぶかによって、自分のその後の人生はだいぶ左右されます」と強調した。

そして最後に、「中央大学は法曹の世界で高い評価を受けています。資格取得の勉強もいですが、スポーツにもっと力を入れていく必要があると思います。テレビ中継があれば、宣伝効果は抜群です」とテレビメディア・トップの早河氏ならではの言葉で、講演を締めくくった。

(学生記者 鈴木あきほ 法学部1年)

雑然とした雰囲気がない」

学生時代の早河氏は、「高校のときから格好良いと思っていた応援団」に入ろうとしたが、結局は放送研究会に入り、制作部を担当した。

大学2年のとき、初めてラブストーリーの脚本を書き、全国コンクール

で4位になった。「思い返すと、これが人生で一つ目の大きな分かれ道だった」と早河氏は語った。

大学祭の運営にも携わり、イベントを成功させるためにスタッフの相互理解やコミュニケーションを深めることに努め、「人と人との付き合い合